

改訂の序

近年、わが国では数多くの薬が創出され、同じ疾患に対する治療薬でも作用機序の異なる薬や同じ系統の類似薬が数多く存在するようになりました。その結果、臨床の現場から「多くの類似薬からどの薬を選べばよいか判断が難しい」、という医師の意見が数多く寄せられるようになりました。薬を適正に使用するためには患者さんの病態に合わせて、適切な薬を選択する必要があります。そのためには各々の薬の特徴をしっかりと把握しておかなければなりません。そこで、日常診療で患者さんがしばしば訴える症状を13選び、それらの症状を治療するために用いる薬の使い分けを解説した『頻用薬の使い分け』を2010年に出版しました。初版では、日常診療でよく用いる頻用薬を対象にし、個々の患者さんの病態や合併症を考慮した適切な薬の使い分けを、多くの症例を用いながら、その根拠も踏まえて具体的にわかりやすく解説しました。出版以来、幸いにも好評を得て、増刷を重ねてきました。

初版の発行より5年が経過し、その間に多くの新薬が登場し、さらに各種ガイドラインが改訂されたことより、薬物治療の内容も変わってきました。そこで内容を最新の情報に改め、さらに治療の対象となる症状を13から19に増やし、より充実した改訂版を発行することにしました。執筆者はいずれも臨床経験の豊かな医師であり、個々の患者さんに対する頻用薬の使い分けについて現場の状況に沿った内容になっています。

薬の有害反応が毎年数多く厚生労働省に報告されており、医師にはより適切に薬を使うことが求められています。本書の姉妹書である『類似薬の使い分け 改訂版』（2014）および本書『頻用薬の使い分け 改訂版』（2015）が薬を適正に使用する際の情報源となり、安全な薬物療法が行われることを期待しています。

最後に、本書の企画・編集にご協力いただきました羊土社編集部の秋本佳子様にお礼申し上げます。

2015年8月

藤村昭夫